主日礼拝説教「神の国の食事を始めてみる」予稿

日本基督教団石神井教会　2023年6月11日

【旧約聖書日課】サムエル記下　7章4～16節

4しかし、その夜、ナタンに臨んだ主の言葉は次のとおりであった。
5「わたしの僕ダビデのもとに行って告げよ。主はこう言われる。あなたがわ
たしのために住むべき家を建てようというのか。6わたしはイスラエルの子らを
エジプトから導き上った日から今日に至るまで、家に住まず、天幕、すなわち幕
屋を住みかとして歩んできた。7わたしはイスラエルの子らと常に共に歩んでき
たが、その間、わたしの民イスラエルを牧するようにと命じたイスラエルの部族
の一つにでも、なぜわたしのためにレバノン杉の家を建てないのか、と言ったこ
とがあろうか。
8わたしの僕ダビデに告げよ。万軍の主はこう言われる。わたしは牧場の羊の
群れの後ろからあなたを取って、わたしの民イスラエルの指導者にした。9あな
たがどこに行こうとも、わたしは共にいて、あなたの行く手から敵をことごとく
断ち、地上の大いなる者に並ぶ名声を与えよう。10わたしの民イスラエルには一
つの所を定め、彼らをそこに植え付ける。民はそこに住み着いて、もはや、おの
のくことはなく、昔のように不正を行う者に圧迫されることもない。11わたしの
民イスラエルの上に士師を立てたころからの敵をわたしがすべて退けて、あなた
に安らぎを与える。主はあなたに告げる。主があなたのために家を興す。12あな
たが生涯を終え、先祖と共に眠るとき、あなたの身から出る子孫に跡を継がせ、
その王国を揺るぎないものとする。13この者がわたしの名のために家を建て、わ
たしは彼の王国の王座をとこしえに堅く据える。14わたしは彼の父となり、彼は
わたしの子となる。彼が過ちを犯すときは、人間の杖、人の子らの鞭をもって彼
を懲らしめよう。15わたしは慈しみを彼から取り去りはしない。あなたの前から
退けたサウルから慈しみを取り去ったが、そのようなことはしない。16あなたの
家、あなたの王国は、あなたの行く手にとこしえに続き、あなたの王座はとこし
えに堅く据えられる。」

【使徒書日課】使徒言行録　2章37～47節

37人々はこれを聞いて大いに心を打たれ、ペトロとほかの使徒たちに、「兄弟
たち、わたしたちはどうしたらよいのですか」と言った。38すると、ペトロは彼
らに言った。「悔い改めなさい。めいめい、イエス・キリストの名によって洗礼
を受け、罪を赦していただきなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けます。
39この約束は、あなたがたにも、あなたがたの子供にも、遠くにいるすべての人
にも、つまり、わたしたちの神である主が招いてくださる者ならだれにでも、与
えられているものなのです。」40ペトロは、このほかにもいろいろ話をして、力
強く証しをし、「邪悪なこの時代から救われなさい」と勧めていた。41ペトロの
言葉を受け入れた人々は洗礼を受け、その日に三千人ほどが仲間に加わった。42
彼らは、使徒の教え、相互の交わり、パンを裂くこと、祈ることに熱心であった。
43すべての人に恐れが生じた。使徒たちによって多くの不思議な業としるしが
行われていたのである。44信者たちは皆一つになって、すべての物を共有にし、
45財産や持ち物を売り、おのおのの必要に応じて、皆がそれを分け合った。46そ

して、毎日ひたすら心を一つにして神殿に参り、家ごとに集まってパンを裂き、
喜びと真心をもって一緒に食事をし、47神を賛美していたので、民衆全体から好
意を寄せられた。こうして、主は救われる人々を日々仲間に加え一つにされたの
である。

【福音書日課】ルカによる福音書　14章15～24節

15食事を共にしていた客の一人は、これを聞いてイエスに、「神の国で食事を
する人は、なんと幸いなことでしょう」と言った。16そこで、イエスは言われた。
「ある人が盛大な宴会を催そうとして、大勢の人を招き、17宴会の時刻になった
ので、僕を送り、招いておいた人々に、『もう用意ができましたから、おいでく
ださい』と言わせた。18すると皆、次々に断った。最初の人は、『畑を買ったの
で、見に行かねばなりません。どうか、失礼させてください』と言った。19ほか
の人は、『牛を二頭ずつ五組買ったので、それを調べに行くところです。どうか、
失礼させてください』と言った。20また別の人は、『妻を迎えたばかりなので、
行くことができません』と言った。21僕は帰って、このことを主人に報告した。
すると、家の主人は怒って、僕に言った。『急いで町の広場や路地へ出て行き、
貧しい人、体の不自由な人、目の見えない人、足の不自由な人をここに連れて来
なさい。』22やがて、僕が、『御主人様、仰せのとおりにいたしましたが、まだ
席があります』と言うと、23主人は言った。『通りや小道に出て行き、無理にで
も人々を連れて来て、この家をいっぱいにしてくれ。24言っておくが、あの招か
れた人たちの中で、わたしの食事を味わう者は一人もいない。』」

神の国で食事をする【こども説教のために】

ペンテコステの「聖霊降臨」から始まった弟子たちの教会は、いつも一緒に食事をしていたと伝えられています。それは、何よりも、主イエスがいつも弟子たちや多くの人と食事を共にしていたからなのでしょう。

教会の集まりは、実際に食事をしなくても、食卓を囲む交わりとして考えられてきました。弟子たちの教会が「パンを裂くこと」と呼んだ「聖餐（主の晩餐)」を執り行うための「聖餐卓」を礼拝堂の中心に据え、教会がいつも食卓を囲む集まりであることのしるしとしてきたのです。

子どもたちも、まだ洗礼を受けていない方たちも、この食卓に招かれている皆さんです。いいえ、主イエスが「大宴会のたとえ」でお語りになられたような、「無理に連れて来られた一人ひとり」と言ったほうがよいかもしれません。なぜなら、この食卓、聖餐卓からパンと杯をいただくことを知らないまま、ここにおいでになるようになられたからです。

そういう皆さんでこの礼拝堂をいっぱいにしたい。それが、わたしたちの願い、いいえ、主イエスの願われたことです。洗礼を受けて聖餐卓からパンと杯をいただくことを知っている者たちだけでなく、それを知らずに連れて来られた人たちでいっぱいになった教会で、わたしたちは、**神の国の食事をする人**となるのです。**なんと幸いなことでしょう**。

「この家をいっぱいにしてくれ」

今年は 5 年ぶりに「花の日」らしく礼拝堂を花で飾ろうと、皆さんに呼びかけました。どのような花をお持ちくださったでしょうか。

主イエスは、「野原の花がどのように育つかを考えてみなさい」（ルカ 12:27）とおっしゃられたことがありました。きっと、立派な花ではなくて、野草の小さくも可憐な花をご覧になりながら、そうおっしゃられたのでしょう。

そのとき主イエスが本当にご覧になられていたのは、目の前の人々のことです。皆さんのことです。「神は、野原の花よりももっと美しく、あなたがたをよそおってくださる」とおっしゃられたのです。

主イエスがいつも目を向けられていたのは、子どもたちでした。弟子たちの集まりの中に子どもたちの姿をご覧になられると、「わたしのところに来させなさい」（同 18:16）とおっしゃいました。子どもたちが大人に妨げられることがないようにと、お考えでした。子どもたちを、大人に妨げられることなくご自分のところに来させようとなさったのです。それは、大人たちが皆、そうするようにという模範としてなさったことでもあったでしょう。

わたしたちは、しばしば、子どもたちを遠ざけたり、触れてくるのを妨げようとしたりしてしまうのです。たとえば、難しい顔をして。あるいは、無視をして。そのような大人の顔色を、子どもたちは敏感に読み取るでしょう。たしかに、以前に比べて近年は、子どもたちに、安全のため、犯罪に巻き込まれないため、大人に警戒するように教えることが多くなりました。それは、仕方ないことかもしれません。でも、子どもたちは本来、大人よりもずっと素直に、自分の心を開いて近寄って来てくれるものです。

だからこそ、主イエスは、「神の国は、このような者たちのものである」（同 18:16）とおっしゃられたのです。子どもたちこそ、「神の国」の秘訣、神の御心を知っている者たちなのです。誰のことも分け隔てせず、互いに触れ合い、互いを認め合い、そこにいることを誰も否定されないような交わりです。主イエスは、「子どもたちを見なさい」とおっしゃる。「子供のように神の国を受け入れる人」（同 18:17）になりなさい、と言われるのです。

子どもたちを招かれる主イエスは、すべての人をお招きです。「**急いで町の広場や路地へ出て行き、貧しい人、体の不自由な人、目の見えない人、足の不自由な人をここに連れて来なさい**」。「**まだ席があります**」と言えば、「**通りや小道に出て行き、無理にでも人々を連れて来て、この家をいっぱいにしてくれ**」とさえおっしゃいます。そのようにして家を満たした人たちこそ、「**神の国で食事をする人**」たちなのです。

「子どもたちを来させなさい」、「誰でも連れて来なさい」と、主イエスは言われます。教会には、そのような人たちが必要なのです。

「どうしたらよいのですか」

もちろん、ここに来ることを拒む者もあるでしょう。そういう人たちを無理やり連れて来ることはできません。主イエスは「**無理にでも**」とおっしゃいますが、それは「ぜひとも」という意味であって、「引きずってでも」ということではありません。

そもそも、招かれていることを知っている者であっても、拒む者は少なくないのです。その理由は、さまざまです。それぞれ、自分が拒まなければならない事情があることを説明するでしょう。言い訳はいくらでもできます。しかし、要は、その食事の席に着きたくないのです。何をおいてもその食卓を共にしたい、と思っていない人を、無理やり連れて来ることはできません。教会に限らず、家庭でもどこでも、そのような人がいることを、わたしたちは、痛みをもって知っています。

残念なことですが、それでは「神の国の食事」を味わうことはできないのです。子どもたちが妨げられずにいることができるような集まり。町の広場や路地にいるような人も含めてどんな人でも迎えられ、席が埋められるのを待っているような交わり。そのようなところに加わることでしか、わたしたちは、「神の国の食事」を味わうことができません。

教会は、一見さんお断りの高級料亭ではないのです。予約が必要なレストランでもない。予約は不要、料金は任意、ただし相席あり、究極の「こども食堂」です。どれだけの人をお連れくださっても、「まだ席があります」と言わなければならないほどの盛大な宴会を催そうとしているのが、教会です。そのようなところに、「神の国」という、人が理想とすべき世界のあり方を思い描いているのです。

教会に子どもたちがいてくれることは、なんと幸いなことでしょう。わたしたちが「**神の国で食事をする人**」になろうとしていることを、思い出させてくれます。その一人ひとりを、野原の花のように神がよそおってくださっています。その花の咲く席に、わたしたちは皆、加えていただくのです。

その子どもたちに、また、子どもたち同様にここに導かれて来られた方々に、「神の国の食事」を味わい続けていただきたいのです。そうであればこそ、「主の食卓」に招かれていることを、お知らせしましょう。それを知らずに、ここに連れて来られたかもしれません。ですから、無理強いはしません。それでも、「神の国の食事」に招かれた者として、「主の食卓」にもあずかる者となっていただきたいのです。洗礼を受け、「主の食卓」からパンと杯をいただく者の一人となって、わたしたちと共に、まだこの「神の国の食事」の交わりを知らずにいる人々をそこにお連れする役割を、引き受けていただきたいのです。主イエスが、そう願ってくださっているのです。